

---

# ツイン・バード

LIDY

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツイン・バード

### 【Nコード】

N6976A

### 【作者名】

LIDY

### 【あらすじ】

男運のない姉、藤堂芙蓉。報われない恋をする双子の弟藤堂千尋。唯、幸せになりたいだけなのに。

## 目玉が溶けるまで

貴方だけが好きで

貴方に好きになって欲しかった

叶えば、何も怖くなかった

友達の彼氏を奪った事も

ママのお小言も

貴方が本当に好きだった

「全部捨てて」

泣かないのはあたしの主義だった。

「全部いらない」

惨めなのは嫌い。

でも今のあたしは惨めで醜くくて、憐れだわ。

ウォータープルーフじゃないマスカラは繊維で瞼にボロボロ落ちて、  
ケイトのアイシャドウは溶けてる。

「全部は捨てれないよ」

「いらない、みたくないの」

ダダッコのように泣くあたしを困った顔で見つめるのはあたしの双子の弟。

「携帯は捨てちゃだめだよ。」

あいつのメモリは消したしメールも着信履歴も消しただろ？」

「嫌なの、思い出したくないの。」

「じゃあ、明日新しいの買い替えよ？」

優しい手の平にあたしはまた泣けてくる。

優しくされればされるほど喉の奥に角砂糖を詰まらしたような閉塞感に満たされる。

白い携帯。何千通と貴方とメールした。  
何時間も下らない事話した。

そんな記憶は捨ててしまいたい。

「捨ててよ。」

こんなに嫌なのに。

思い出すのは貴方の手の熱さ。  
何を話していたかなんか覚えてないけど、貴方の温度は覚えてる。

「ねえ、なんであたしじゃダメなの。」

あの子ならいいの？」

「バカな男だから。」

蓉の方がいい女だよ。」

泣くなどと言わない弟、尋にあたしは甘えてまた涙をボロボロ溢す。

「窒息しちやいそう。

今頃あの人はあたしに触れた手であの子と寝たりキスしたりしてるんだよ？」

あたしが愛したあの指先で、あの温度で。

酷い裏切りだわ。

解ってる、解ってた。

あの人はあたしのものじゃない。

だから心は自由だっていつも言ってた。

ねえ、それを言う度にあの子とあたしを比べてたの？

いつから、比べてたの？

いつ、あたしを裏切ったの？

二人で優越感に満ちた罪悪感をわけあったの？

「あたし惨めだわ、尋。」

「んなことない」

「嘘、を何時からつかれてたの。

あたしを、どうして裏切ったの。

どうして裏切れるの？

嘘はつかないって、約束したのよ？

なんで、簡単にあたしを捨てたの？」

言えば言うほど泣けてくる。

あたしは、ただ愛しただけなのに。

何でこんなに惨めで、辛くて、哀れなの。

なんで、なんで、こんなに辛いの。

「わからないけど、俺は今あいつを殺したいよ。

蓉をこんなに泣かせて、苦しませてるあいつを殺してやりたい。」

「ねえ、尋、あたし幸せになりたいよ。」

尋は微かに笑った。

「男を見る目がないんだよ、蓉は。」

「…かもしれない。でも好きだったの。」

好き、凄く、好き。

どうして、この思いを過去にしたの。

何回も好きって言い合ったのに。

あの子に優しくする、貴方なんてみたくない。

あたしは今醜い顔をしてる。

きつとメデューサも逃げ出すぐらい醜い。

ヘラの嫉妬ぐらいあたしはあの子を憎んでる。

あたしがいたのよ。

彼の隣には。

彼のベッドの壁側はあたしのもので

埃っぽい部屋で陽射しにふわふわ舞う埃をみるのはあたしの楽しみだったのに

彼の部屋のプーさんはあたしの為に彼がとってくれた

全部あたしのものだったのに。

あのベットにはあの子が寝るの？

あたしのための場所にあの子がいるの？

なんで？なんでなの？

あんなに一緒にいようっていったじゃない

好きだって

嘘つき

嘘つき

なんで貴方は上手に嘘をつけるの？

何が貴方の本当か嘘か判らない

幸せになりたいだけだったのに

「目玉が溶けるまで泣いていいよ」

涙が止まらない。

苦しくて、

息が継げない気がする

「恋、だったんだよ。

苦しくて、辛い。

…でもいつか思い出になる。」

先なんて考えられない。

考えたくない。

貴方が存在しない毎日なんて。

でも、あたしはいつか彼を忘れてあの子を許すのだろう

だって、今あたしを抱きしめる温度がそういうのだから。

私の半身はあたし以上にあたしを知っているから。

だから今は唯泣かせて。

目玉が溶けるまで。



## トロトロに熱い手

姉は破壊的に男運が悪い。

友達の彼を好きになったあげく、付き合う事になったがいいがその男は裏で有名なタラシ。

四股してたとかしてないとか。

まあ結局2ヶ月で別れた。

だから止めとけって言ったのに。

「尋も携帯変えよ？」

泣き腫らした目は必死に冷やして化粧でいつものように笑う姉は、とても間抜けで可愛い。

「別にいいけど」

どうせ変えるつもりだったから了承する。

「尋はどれがいい？」

繋いだ手がじんわり暖かい。

「これは？」

イロチでオソロにしよう？」

「ハイハイ」

姉はオソロが大好きだ。

大学生にもなって兄弟でオソロもないとは思うが、それで蓉が喜ぶならばそれでかまわない。

俺は唯誰よりも蓉に幸せになって欲しいだけなのだから。

結局俺達はお揃いの携帯を購入した。

蓉が水色で俺が黒。

「尋は彼女と上手くいってる？」

タリーズで休憩をしていると蓉がふと尋ねてきた。

「別れたっていったじゃん」

「あれからいないの？」

「あれからって別れてまだ一ヶ月だよ？」

「ふーん。尋、実はもてるからすぐに新しい彼女がいると思ってた。」

けたけた笑いながら、鞆のタバコに手を延ばす。

蓉はいつもソブラニーのピンクを吸う。

「久々に蓉が煙草吸うの見るな」

「…しばらく禁煙してたんだもん」

あいつが煙草嫌いだから、とは言わない。

「吸いすぎんなよ」

蓉は薄く笑った。

彼女はヘヴィに吸う。

情緒不安定な時は最低で一日4箱吸っていた。

蓉曰く、泣きたくなると煙草を吸いたくなるらしい。

泣きそうなら、いつだって傍にいるのに。

俺は自分で宣言するのなんだがシスコンだ。

蓉を大事に思うし、大切にしたいし、可愛いと思う。

親とか友達というより蓉というのが好きだ。

たぶんそれは双子だから。

なんといえど、少しでも理解してもらえたらどうか。

同じ人間だから、というのが一番近い気がする。

蓉が痛ければ、俺も痛い。

蓉が幸せになれば、俺も幸せになれる。

だから俺は、蓉を愛してやまない。

「ねえ、尋、あれ、美和子？」

やけにぶつぶつ、きりながら蓉が指差した先にはショートカットの女が立っていた。

そして、その隣には、あいつが。

「見んな。」

「……気づいちゃうんだもん。」

泣きそうな顔で俯いて、煙草を大きくすう。

「大丈夫、もう泣かないから。」

嘘付けよ、泣きそうなのに。

思わず手の平で蓉の視線を塞ぐ。

「…尋の手凄く熱い」

「血行がいいんだよ」

「手が冷たい人は心が暖かいとかなんて嘘よね。」

尋の手は溶岩みたいにトロトロ熱くて、馬鹿みたいに優しいんだもん」

「蓉、俺は蓉以外に優しくないから半分はその迷信あってるかもよ？」

蓉が微かに笑った。

それはため息のように、息だけで微かに笑ったのだが。

俺はこの馬鹿で間抜けで破壊的に男運のない姉がどうしようもなく愛しい。

## 喉を焼く酒

ウイスキーとアマレットが軽く喉を焼く。

久々の大好きなゴッドファーザーは私を、あやしてくれなかった。

「唯、好きだったのに。

どうして、裏切られるの。」

カラン、と鳴るキューブアイス。

暗い照明の下、呆れた友人の小枝が、酒臭い溜め息を吐く。

真っ黒な丸いカットのボブに軽く手を遣り、赤い口紅の剥げた唇を  
緩慢に動かす。

「芙蓉、いい加減にしないよ。」

「何よ、飲んで、忘れろって言ったじゃない、嘘つき。」

「愚痴なら聞いてあげるわ、でも同じ事言うのやめなさい。

いい、男なんぞ所詮ヤルしか考えてないの。

それは生物学上仕様のない事なのよ。

より多くの雌と交尾して、より多くの子孫を残そうとする。

わかるわね？」

「じゃあ、女は雌は雄の生殖を満たすためなら子宮があれば、なん  
だっていいの？」

毎月女は命の半分を殺す作業に苦しんで、血を流すのに。男は無駄  
に腰振って命の半分殺してんのに気持ちいいのよ。

オーガズムとか感じちゃうのよ。  
なんで、女ばっかりこんな苦しいの。  
不公平よ、憐れよ、惨めだわ!!」

小枝はギムレットのオリーブを串から咬みきった。

ゆっくり咀嚼した後で、ゆっくり唇を開いた。

「いい？だから動物は、雌の方が強いじゃない。  
交尾をしたいかしたくないかは雌に決定権がある。

それが当然なのよ。雌が産む苦しみを負うのは、へにゃちんの遺伝子を残すためじゃないのよ。

より強い雄の遺伝子からより良い個体を残すためでしょう？

だから人間だって昔は女が強かったのよ。

言うでしょう、太古女は太陽だったって。

考えてみなさいよ。

男って生き物を。」

あたしはまた出てきた涙を乱暴に拭きたいけど  
マスカラやらアイラインが崩れるの嫌で丁寧ハンカチーフで抑えた。

「穴があればいいのよ」

あら、鼻水まで垂れてきそうだけど我慢して、男について吐き捨て  
てみる。

「常に自分に対する賛辞を要求するし、  
そう聞くバカ男のテクなんざ評価するまでもないのよ」

「そう。つまり奴らは憐れなのよ。

雌に認めて貰って尊厳を保とうとしてる。

だからあんたがたかだか男一人でメソメソするなんて、勿体無いじゃない。

たかだか男一人よ？

所詮偉そうにしてみたところで人工比率から言えば男は余るのよ。そんな糞みたいな男を思うより、もっといい男を探さないよ」

「でもね小枝。

男といい男の比率だとね、

いい男って凄く少ないと思うの。

その希少ない男はいい女が取って行くのよ」

小枝は肩を震わせながら笑って、

「そりゃそうだ。

でも、あんたはいい女よ」

猫みたいなアーモンドアイを優しく緩ませて小枝が言う。

暖かい、柔らかい手で頭を撫でて貰ったら

胸の中で固まっていたぐつぐつしたものが少し溶けた気がした。

「ちょっと男を見る目がないけど、いい女だわ。」

小枝は男がみたら膝まつきたくなるような

極上のアカシアの蜂蜜の笑顔で笑って、囁いた。

「次はいい男に惚れなさい。」

思わず、はい女王様なんて言いたくなったのは内緒だ。

## 青い爪を

夜中の電話はろくな事じゃない。

「飲ませ過ぎたみたいなの」

極上の笑顔でまだ酒を喉に流し込むのは小枝さんだ。

少しアンティークなアバズレは赤いルージュを申し訳なさそうに歪ませた。

「姉がご迷惑おかけしました」

うーうー言いながら蓉は唸っている。

もしあと一滴アルコールを彼女にいれたら、間違いない吐く。それまで飲んでいた。

「蓉、帰るよ？」

「かえ、る」

弱弱しく答えるが、立つ気はないようだ。

正確には立てれないのだろう。

「一体何杯飲ませたんですか」

「……さあ？」

軽く睨むと笑いながら肩をすくめた。

「でね、少年よ。」

私は君の大切なお姉さまの振られ嘸を熱弁され、暴れられて、お気に入りの方に意味不明な電話をされるわ、変な男に声をかけられているこの子を連絡のつかない弟を待っていてほって置くに於けない状態になって終電を逃して待っていた友人を泊めてはくれないかしら？」

軽く肩をすくめて笑うと彼女はグラスを傾けて笑った。

「ねえ、大恋愛って何回すると思う？」

「：運が良ければ一回かな」

「でもこの子は毎回大恋愛だわ」

くたつと彼女はテーブルに凭れて彼女は言った。

「羨ましくなるわ、愛を信じてる彼女が」

「小枝さんは信じてない？」

ソファに座り、スヤスヤ寝だした蓉の上に上着をかける。

そしてダーティマティーニを注文した。

「あたしには訪れないかもね」

そう言つて笑う彼女は少し寂しそうで、幼くみえた。

「ねえ、貴方には愛つてやつが来た？」

「僕は要らない。蓉が幸せになればいいから。」

「：そう。このシスコンが」

そつと綺麗に整えられた爪を頬に当てた。

暗がりできらりと光るターコイズ。

それは誰かを傷つけてきた、そして自分を傷つけてきた色のような気がした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6976a/>

---

ツイン・バード

2010年10月28日03時49分発行